

教員の授業改善に向けた効果的な校内研修の在り方について
～校内研修推進のための「授業研究診断ルーブリック」の作成と検証～

三重県教育委員会事務局 研修企画・支援課 企画・支援班 研修員 奥田 勝久

I 研究の目的

「教員の授業改善に向けた効果的な校内研修の在り方」を探ることを目的とする。授業研究を中心とする校内研修をより効果的に推進していくためには、その取組状況を診断・評価し、改善を図る評価基準を活用することが有効であると考えられる。

そこで授業研究の取組状況の評価基準となる「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)【資料1】を作成し、その活用状況や授業研究の変容を探ることで、教員の授業改善に向けた効果的な授業研究を中心とした校内研修の在り方について考察するとともに、より効果的な「授業研究診断ルーブリック」を作成していく。

II 研究の内容

(1) 「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)の作成

自校の授業研究の取組状況を診断・評価し、授業研究の質の向上を図るために活用することを目的とし、「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)を作成した。

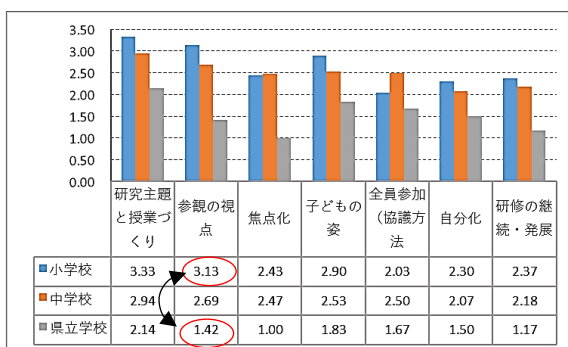
「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)を有効に活用するための考え方は以下のとおりである。

- ・評価観点の各レベルに評価基準として、具体的な目指す姿を記述することで、客観的に授業研究の取組状況を診断・評価することができる。また、評価結果をもとに次の目標をもつことができる。
- ・「事前検討」「研究授業」「事後検討」「再構成」を1サイクルとして、1回の授業研究会毎に診断・評価することができる。
- ・診断・評価結果を基に、授業研究推進リーダーと研修主事が所属校の授業研究会の取組状況について、共有を図ることができる。

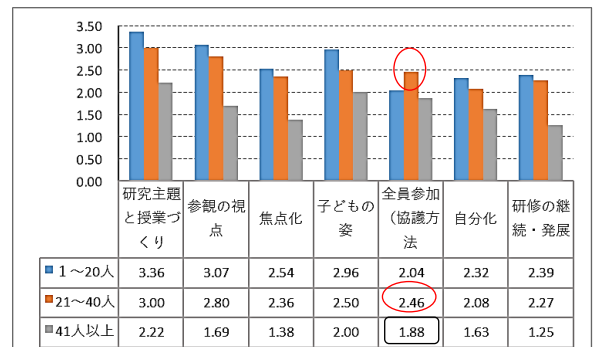
(2) 「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)による診断・評価結果の考察

目的	「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)を使用し、現時点(8/22)での各校の授業研究会の取組状況を把握するとともに、アンケート調査を行うことで、「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)の改善を図る。
対象	第2回授業研究推進リーダー育成研修オープン講座 受講者
対象者数	38名(内訳:小学校15名、中学校16名、県立学校7名)

校種別診断・評価結果



教員数別診断・評価結果



(考察)

- ・「参観の視点」の観点で、小学校と県立学校では、大きな差(1.71ポイント)がある。県立学校においては、参観の視点を設定した授業研究の取組が進んでいないと思われる。
- ・全員参加(協議方法)の評価・観点においては、教員数が21人から40人の学校が一番平均値が高い。教員数が41人以上の学校は、1.88ポイントと平均値が低く、全員参加に向けた取組が進みにくいと思われる。教員数が少ない学校においては、協議方法を工夫せずとも全員が活発に発言できる環境にあることが考えられる。

(3) 「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)の活用と実践にかかる調査研究からみえてきたこと

8校の活用事例を考察すると、大きく次の2つに類別することができる。

① 診断・評価を経た客観的な振り返りによる活用事例

診断・評価を経て自校の授業研究の取組状況を客観的に捉え、成果や課題を実感し、次なる目標に向けてアクションを起こした事例である。

(様式4)

(A小学校、B小学校、C中学校、D中学校、E中学校、F中学校、G高等学校【資料2】)

② めざす姿を共有し、新たな取組を生み出す活用事例

事後検討会が実施されていないという自校の状況から、「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)を参考にして、7人の授業研究グループのメンバーが、その「事後検討」の分野の4つの評価観点に着目し、レベル3の評価基準を目標に、事後検討会を実施していった事例。(H高等学校)

「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)の活用と実践について探った8校の状況を、評価観点に照らして集約し、『授業研究診断ルーブリック』(8月試案)の活用による評価観点別にみた授業研究の推進【資料2】にまとめた。「エ. 子どもの姿」の評価観点においては、8校中5校が「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)の活用により、改善が図られている。次いで「ウ. 焦点化」「オ. 全員参加」「キ. 研修の継続・発展」は4校で改善が図られている。そして、ア～キの7つの評価観点は8校のどの学校でも活用により気づきが得られたり、改善が図られたりしている。このことから「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)の作成段階において仮説した各項目の視点において、気づきが得られて改善が図られていると言える。すなわち、この評価観点は授業研究の質の高まりや推進につながる観点であると考えられる。

III 成果と課題

1 成果

(1) 昨年の研究では、大阪教育大学木原俊行教授の講義にあった5つの観点で抽出校(中学校3校)の授業研究の状況をみると、中学校の授業研究会では、「自己教材化」と「焦点化」の取組が進んでいない状況が把握できた。【資料3】「自己教材化」は「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)では「カ. 自分化」にあたる。

本年度の研究では「自分化」の評価・観点においては、中学校4校中3校で改善や気づきがみられた。また、「焦点化」の評価・観点においては、4校中4校で改善や気づきがみられた。

(2) B小学校、F中学校の活用・実践の状況から私が作成した「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)の評価観点にはない「外部人材の活用」という、評価観点の必要性に気づくことができ、「授業研究診断ルーブリック」(試案)【資料4】に、「ク. 外部人材の活用」を追加した。

(3) 「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)において、次のような視点で取組を進めることで、効果的な授業研究が推進され、教員の授業改善が図られていくことにつながるということが提案できた。

- ・各学校が目指す具体的な授業像が教員間で共通理解され、研究主題に基づく授業づくりを進める。
- ・共有化された授業づくりのどの部分に注目して参観するのかを共有し、自己の授業と照らしてみていることで、一人ひとりの参観者が授業改善の方策について考えをもって事後検討会に臨む。
- ・参観の視点に沿って協議内容を絞り込み、話し合いを進めることで協議の論点が焦点化し効果的に協議を深める。
- ・「何が分かり」「何ができるようになったのか」学びの主体者である子どもの姿をみることをとおして、教員の手立てや具体的な授業改善の方策について考えていく。
- ・参加者全員が主体的に授業研究に参画していくため、協議方法等を工夫し、授業研究会での学びを参加者一人ひとりの授業改善につなげていく。
- ・授業研究会での学びを授業改善に活かす場面を設定し、参加者一人ひとりが具体的な授業改善案をもって、より良い実践につなげていく。
- ・1回1回の授業研究会の成果と課題、改善策を明らかにし、授業研究会の記録化や教員間で共有化を進め、次回の授業研究会に向け継続・発展させていく。

2 課題

(1) 「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)を活用し、診断・評価するだけで、各校の授業研究が改善されていく訳ではない。研修主事とのコンサルテーションやユニット研修で他校の教員との意見交換によって、新たな気づきが生まれ、より深い振り返りにすることができていた。このような状況をみると、「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)を活用して教員の授業改善を図るには、第三者からの客観的な診断・評価を取り入れていくことも必要であると感じた。

(2) 授業研究推進リーダーのみが「授業研究診断ルーブリック」(8月試案)により診断・評価するだけでなく、複数の教員で診断・評価し、その違いについて話し合ったり、次回の方策を考えたりすることで、より一層授業研究が推進されるのではないかとと思われる。